

雪雲の中で

クリスマス寒波で北日本が大荒れとなった夕刻、「天候状況によつては羽田に引き返します」との条件つきで新千歳空港へ向かった。羽田を離陸して1時間、「滑走路が除雪中です。着陸の順番待ち5番目です。二〇分ほど函館上空で待機いたします」という軽やかなアナウンスがことの始まりとなった。日没直後の暗くなった空に紫がかった紺青色の光が水平線の雲の上に残り、単調な旋回が何度か続いた。

状況が一変したのは着陸を目指して新千歳空港上空での旋回に移った時からである。雪雲に入るたびに激しい上昇気流に遭遇してジャンボの大きな機体がフワリと持ち上げられるのがわかり、激しい気流の乱れで大きく揺れた。幸運にも主翼のつけ根の座席だったので、照明灯のビームの中を高速で流れる雪片の有りさまを見ることができた。まさに流体実験そのもので、大小さまざまな雪片が無数の白い線となつて暗闇に浮かび上がり、見事なまでに可視化された流れが翼をなめるように流れる姿は壮観だった。

余裕はここまでだった。五回十回と雪雲を突き抜けた飛行時間も予定の「時間半を五〇分近く越し、遠くに雷光も見えて不安がもたげはじめた。再び雪雲に入ったそのとき、飛行機の周辺が一瞬、青白く光

った。飛行機への落雷である。バリツと音を聞いたような気がしたがさだかでない。機内にざわめきが走り、期せずして「たがいま機体に落雷しましたが影響ありません」との機内アナウンスがあった。飛行機は自動車と同じで落雷しても機内は安全と習っていたが、激しい吹雪のなかでの落雷は心地よいものではない。

不思議なもので、この落雷のあと間もなく雪雲がきれて視界がよくなつてきた。前方のスクリーンに空港の滑走路を示すオレンジ色の進入灯がかすかに見えはじめ、点が次第に一つ一つの灯に識別できるようになり、ついに滑走路の姿が現れた。地上は白一色で弱い吹雪だった。筆者も氣象を仕事の糧としているもの、予報を出す目線と実際に遭遇した激しい現象との落差を肌で感じる経験となった。

あの厳しい条件下で1時間近くも旋回してギリギリのところを着陸にこぎつけてくれたパイロットに敬意を表したい。空港はこのあと再び閉鎖されたと聞いた。

村松 照男